安房國一之宮

安房神社略記

祖神を偲ぶ天富命

満開の桜と新緑の境内

あめのとみのみこと
「天富命　猛獣を狩り盡し給ふ図」寺崎武男氏・画(御祈祷控処に展示)

御神木　「槇（まき）」推定樹齢五百年

安房神社社務所

〒294-0233
千葉県館山市大神宮589
TEL.0470(28)0034
FAX.0470(28)0438
URL:www.awajinjya.org

ホームページ
フェイスブック

宝物 日蓮上人作木製狛犬※非公開

宝物狛犬

文永元年(一二六四年)、日蓮上人が四十二歳厄年のおり一週間当社にこもって一心不乱に刀を振るい、誓願成就のお礼として奉納したのがこの狛犬である。

他に館山市の指定文化財として、高坏（たかつき）、燧箱（ひうちばこ）、木椀、双鳥花草文円鏡（そうちょうかそうもんえんきょう）、双鳥花草文八陵鏡（そうちょうかそうもんはちりょうきょう）がある。

神棚のまつり方

神棚は床の間に奉安するのが理想的ですが、一般には家の内で最も清浄を保ちやすく、朝夕の拝礼がしやすい場所が適当です。

よく神棚を設ける際に、その方向を云云しますが、古い伝えによりますと「南向きにまつるを最も吉とし、東向きにまつるも宜し」とあります。

御神札のまつり方

神棚の正面に天照皇大神様の御神札をまつり、向って右側に氏神様の御神札をまつり、向って左側に八百万の神々様の御神札を御まつりします。

拝礼の仕方

まず水で手と口を清めて御神前に進み、祈念をこめて二拝（二度おじぎをする）次に二拍手し、もう一度拝（おじぎ）をします。

これは神社へ御参拝の場合、又家庭の神棚の拝礼のときも同様です。

みどり豊かな社叢林

本社御祭神（上の宮）

日本産業総祖神
天太玉命（あめのふとたまのみこと）
相殿・后神
天比理刀咩命（あめのひりとめのみこと）

摂社御祭神（下の宮）

房総開拓の神
天富命（あめのとみのみこと）（天太玉命御孫神）
日本武道祖神
天忍日命（あめのおしひのみこと）（天太玉命御弟神）

由緒・御神徳

「古語拾遺（こごしゅうい）」や「先代旧事本紀（せんだいくじほんぎ）」といった書物によれば、安房神社の始まりは二六七〇年以上前にさかのぼるという。現在下の宮に祀られている天富命は、神武天皇の勅命により四国・阿波徳島の忌部一族を率い肥沃な土地を求めて旅立つこととなり、海路黒潮にのり房総南端のこの地に到着した。そして上総・下総に進み麻や穀（かじ）（紙の原料）といった植物を播殖して、その産業地域を広げていった。開拓を終えた天富命は、無事成し遂げられたのも祖先の御加護によるものだと考え、祖父にあたる天太玉命をお祀りして、祖先の恵みに感謝したのである。

「安房忌部家系之図」によれば、元正天皇の養老元年（七一七）に現在の場所へと天太玉命を奉斎し、同時に天富命も下の宮に祀ったという。

上の宮の御祭神である天太玉命は、天照大神のそば近く重臣として奉仕し、天照大神が天岩戸にお隠れになった時には、中臣氏の祖神・天児屋根命（あめのこやねのみこと）とともに大神の出御のために活躍した神である。また子孫にものを作る技術に長けた神が多くいたことから、産業の総祖神としてその神徳を世に顕わしている。

現在は安房全域をはじめ上総・下総・関東地方の信仰を集めており、交通安全・厄除開運・家内安全・商売繁盛などを願う人々がこの地を訪れている。

置炭・粥占神事

置炭・粥占神事（一月十四・十五日）

一月十四日の夕刻、正月に用いた門松の松材で火をおこして粥を炊き、薪が燃え尽きるころ、おきを十二本取り出して並べ、その燃え具合によって神主が一年間の天候を占定するのが「置炭神事（おきずみしんじ）」である。

一方の「粥占神事（かゆうらしんじ）」は、すのこ状に編んだ十二本の葦筒をその鍋に入れて一晩置き、明くる十五日の朝、取り出した葦筒を一本ずつ小刀で割って粥の入り具合やつやによりその年の農作物の豊凶を占定するというものである。

当社旧記には、これらの神事が宝暦年間から行われていたことが記されている。

主な祭典

四月上旬　桜花祭

歳旦祭	一月一日	忌部塚祭	七月十日
有明祭	一月四日	例祭	八月十日
置炭神事	一月十四日	御仮屋祭	九月十日
粥占神事	一月十五日	国司祭	九月中旬
節分祭	二月三日	琴平社祭	九月二十七日
建国祭	二月十一日	抜穂祭	十月上旬
祈年祭	二月十七日	新嘗祭	十一月二十三日
桜花祭	四月初旬	新穀感謝祭	十一月下旬
御田植祭	五月上旬	神狩祭	十二月二十六日
下の宮祭	五月十日	大祓式	十二月三十一日
厳島社祭	六月十日	除夜祭	十二月三十一日
大祓式	六月三十日		

※その他毎月一日に月次祭がある。

安房國司祭へ出立の朝